

一人暮らしの高齢女性の「大人に一人」が貧困に陥っています。昔懐かしい男女賃金格差、女性の低年金なども、ゆがんだ社会構造があります。シエンター平等の土台が問われています。(高川聖子)

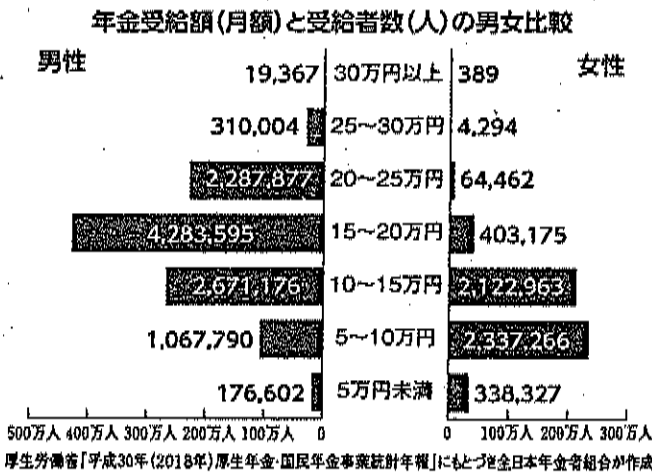
女性の貧困

「もうがむ苦勞してから」を感じてきました。私が勤めてきたんです。

「引っこかり」
若い頃から、女性であることで「引っこかり」が、女性には「手伝い」
「引っこかり」
若い頃から、女性であることで「引っこかり」が、女性には「手伝い」
「引っこかり」
若い頃から、女性であることで「引っこかり」が、女性には「手伝い」



42年納め年金月10万円



程度の仕事」しか求められませんでした。手に職を、とテサインを学ばせました。いっつか職場をへて、やっと正社員の仕事を得た数年後、息子を産みました。

70歳を過ぎて
その後、友人の紹介で何とかが通30時間の仕事を言いつけました。しかし職場は「報酬減」を理由にパート職を大幅に減らしました。その多くは女性たち。辞めていく仲間も

サービスを受けている。シエンターなんていう言葉も「ん」といふまで時間がかかっています。母子家庭になり、高齢者になり、制度のしくみを体験し、男女の区分けを感じます。社会でも文化でも、あらゆる所に染み付いている」
今、同じ境遇の女性たちと手を繋ぎ、声を上げていきます。
「この地域だから見えること、私たちが考えること、私たちが望んでいること、性別によらず、シングルでもダブルでも、若年期になっても安心して基本的な社会生活が送れるような社会であってほしい」と願っています。

全日本年金者組合によると、年金月額10万円未満の受給者は男性124万人、女性は267万人。女性は50%超は年金が10万円未満です。(グラフ参照)
65歳以上の単身女性は約400万人と増えています。
東京都立大学の阿部彩教授によると、一人暮らしの女性の貧困率は、勤労世帯(20~64歳)で24%。高齢期(65歳以上)は46%に上ります。(つづ)